

肺炎に注意しましょう

監修：山口内科 院長 山口 泰 先生

肺に炎症が起こる病気・肺炎

肺炎は、細菌やウイルスなどが肺に入り込み、炎症を起こす病気の総称です。かぜをこじらせたり、ほかの病気にかかり、免疫力や体力が低下しているときに併発して起こる、二次的な病気としても知られています。

空気を肺へ送る気管の先端には「肺胞」という吸い込んだ空気を入れる袋があります。また、肺胞と肺胞の間を「間質」といい、この隙間には血管などがあります。この肺胞と、間質にある血管の間で、酸素と二酸化炭素を入れ替えるガス交換が行われています。肺炎では、肺胞、間質に炎症が起こり、呼吸がしにくくなります。

肺胞性肺炎と間質性肺炎

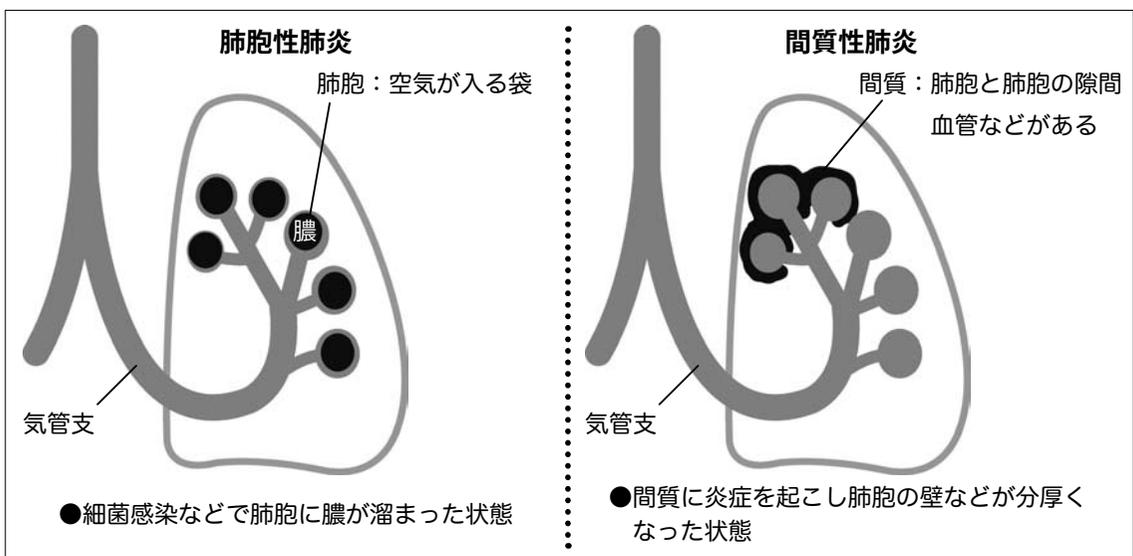
【肺胞性肺炎】

肺胞に細菌が入り込み、化膿して膿が溜ま

る肺炎を「肺胞性肺炎」といいます。肺炎というと一般に肺胞性肺炎をさします。肺胞性肺炎を引き起こす代表的な原因菌は、肺炎球菌、インフルエンザ菌（ウイルスとは異なります）などです。

典型的な肺胞性肺炎の症状は、熱が上がり、咳とともに黄色や緑色の膿のような痰がどんどん出ます。レントゲン写真が診断の決め手となるので、肺炎の疑いがある場合は速やかに医療機関を受診し、レントゲンを撮りましょう。肺炎を起こし、肺胞に膿が溜まってむくんでいるところはエックス線が通りにくくなるので、白っぽく写ります。

肺炎を引き起こす細菌は、口から気管、気管支を通り、肺胞にさかのぼります。肺胞性肺炎では、かぜから気管支炎へと上気道の炎症をこじらせて菌が奥へ奥へと入っていくため、かぜをひいたときに無理をしたり、咳が出ているのに放っておくことのないよう、気をつけましょう。



■誤嚥性肺炎

食物や痰を誤って気管に吸い込み、肺に入って起こる肺炎です。空気と食物を気管と食道に振り分ける働きや、異物が気管に入った際に咳をして吐き出す働きの弱い、高齢者や乳幼児に多い肺炎です。副鼻腔炎などの鼻の悪い人も、細菌を含んだ鼻汁を気管内に吸い込んで肺炎を起こしやすいため、注意が必要です。

【間質性肺炎】

間質が炎症を起こす肺炎を「間質性肺炎」といいます。間質の炎症によって肺胞の壁などが分厚くなり、ガス交換がうまくいかなくなり、息切れがします。

原因は様々で、代表的なものとしてマイコプラズマ、インフルエンザウイルスやアデノウイルスなどのひどいかぜを起こすウイルス、放射線や薬剤などが挙げられます。

間質性肺炎では、高熱、咳が出ますが、痰はあまり出ません。

現在では様々な抗生物質が開発されており、肺炎も昔ほど怖い病気ではなくなってきましたが、肺炎が疑われる場合は速やかに医療機関を受診しましょう。

肺炎が疑われる症状

- 咳や痰がふえた
- 38度以上の高熱が出て、なかなか下がらない
(3日以上続いている)
- 息切れがする
- 食欲不振や倦怠感が強い

若年者に多い マイコプラズマ肺炎

マイコプラズマ肺炎は、間質性肺炎のひとつで、マイコプラズマという、細菌とウイルスの中間の大きさの病原体に感染して起こります。通常の肺炎が高齢者に多くみられる一方、マイコプラズマ肺炎は学生などの若年者に多くみられます。これまで、4年ごとに流

行する傾向がありましたが、近年ではそれがなくなりつつあります。

マイコプラズマ肺炎の症状は熱とひどい咳、息切れが特徴で、痰はあまり出ません。かぜをこじらせて起こる肺炎とは異なり、マイコプラズマに感染することにより、かぜの症状なしに熱、咳、息切れなどの症状が現れます。

マイコプラズマ肺炎は唾液の飛沫によって、ほかの人にうつる肺炎なので、周囲に感染が広がらないように気をつけましょう。治るまでは登校を控えるようにし、しばらくはマスクを着けて他者への感染を防止します。学校や塾で感染が広まる場合が多いので、マイコプラズマ肺炎の患者が出た場合には、周囲に感染が広がっていないか注意し、周囲に症状が現れたときには、肺炎を疑った診療をしていくことが求められます。

学校保健法では、第3種学校伝染病として指定されています。条件によっては出席停止の措置が必要です。

マイコプラズマ肺炎には抗生物質が効くため、治療によって1週間ほどで治ります。激しい咳が長引くなど、マイコプラズマ肺炎が疑われる症状があるときは、二次感染を防ぐためにも、速やかに医療機関を受診しましょう。

肺炎の予防のために

一般の肺炎は、かぜやインフルエンザが進行して起こる場合が多いので、まずはかぜやインフルエンザにかからないよう気をつけることが大切です。うがい・手洗いを励行し、人込みを避け、マスクを着用しましょう。

マイコプラズマ肺炎の場合には、患者との濃厚な接触を避けるようにします。また、マイコプラズマ肺炎に感染したときは、感染を広げないために、本人も必ずマスクを着用しましょう。

【参考資料】

『わかって治す 家庭の内科学』 著/山口泰 発行/こま書房
山口内科HP <http://www.yamaguchi-naika.com/>